

第3章 歴史文化の特性

歴史文化の特性～人と大地の歴史が息づく源流のまち～

本市は岡山県三大河川の一つである高梁川の最上流部に位置し、美作地域、鳥取県、広島県からの道路や鉄道が集まる場所にあります。本市の北部は豊かな森林からなる中国山地、南部はなだらかな吉備高原からなり、それぞれ特徴的な地質で構成されています。その間を通る河川の合流点や盆地にまちが開かれ、人々はその周辺の大地を利用し、影響を受けながら生活してきました。そのため本市の歴史文化は大地の成り立ちと切り離して語ることはできません。

そこで、本市を大地の観点から見た場合、「山地と高原に挟まれた源流のまち」と捉えることができ、歴史文化の特性は「(1) まちを作った河川と新見盆地」「(2) まちに恵みをもたらした中国山地の山と渓谷」と「(3) 暮らしの場を作り出したなだらかな吉備高原」があげられます。人々はその大地を主とする歴史文化の上に立って「大地が生んだ新見の歴史文化」を作り上げてきました。その中身を表す歴史文化の特性が「(4) 中世新見の莊園と歴史文化」と「(5) 今につながる近世新見のまちづくり、ひとづくり」です。そして人々は大地の上で平穏を祈り、恵みに感謝する中で「(6) 祈り・信仰を今に伝えるまち」としての歴史文化の特性を作ってきました。

本市を形づくる歴史文化の特性を6項目に整理し、それぞれの概要をまとめました。

新見市の歴史文化の特性～人と大地の歴史が息づく源流のまち～

◆山地と高原に挟まれた源流のまち

- (1) まちを作った河川と新見盆地
- (2) まちに恵みをもたらした中国山地の山と渓谷
- (3) 暮らしの場を作り出したなだらかな吉備高原

◆大地が生んだ新見の歴史文化

- (4) 中世新見の莊園と歴史文化
- (5) 今につながる近世新見のまちづくり、ひとづくり
- (6) 祈り・信仰を今に伝えるまち

◆山地と高原に挟まれた源流のまち

岡山県西部を流れる高梁川の源流域には中国山地と吉備高原があり、これらの地域にはその地形の違いに応じて、それぞれ特有の歴史文化が作られてきました。本市を流れる河川はすべて高梁川水系に属し、その多くは市街地のある新見盆地周辺で高梁川と合流します。河川に沿って古くから街道が開かれ、河川が合流する小盆地に集落ができました。そのうち最大の新見盆地は物流や文化の交流の拠点となり、中世の新見荘や江戸時代の新見藩の中心地として栄えました。そして現在も鉄道の拠点です。本市の特性のひとつはこれらの地形と地質による恵みが都市の歴史に反映されていることです。



写真 3-1 高梁川（三日市庭の船着場）

(1) まちを作った河川と新見盆地

中国山地を源流とする高梁川とその支流は、土砂を運び、平地の谷底平野や新見盆地を作りました。河川は人や文化の通り道となり、平地は居住地となりました。特に新見盆地は新見荘や新見藩の中心地として発展しました。

中国山地を深く削り、本市を南北に縦断して土砂を運んできた高梁川は、阿哲台の石灰岩地域で急激に川幅が狭くなるため、流れにくくなった土砂を上流側に堆積させ、谷底平野を作りました。さらに吉備高原の河川を集めて流れる西川や北東部の中国山地から流れる小坂部川や熊谷川が、阿哲台を避けるようにしてそこへ集まり、新見盆地の平地を作り出しました。河川が集中する盆地は人や文化の交流地点となり、新見盆地は中世の新見荘から近世の新見藩を経て現在の本市の中心地となりました。また、小坂部川上流の小阪部盆地では伯州街道と作州街道が合流し、中世には永富保・小阪部郷・多治部郷などの荘園ができ、近世には水谷家領となり陣屋が作られるなど栄えました。これらの盆地をつなぐ河川の存在によって、本市は古代から現代まで、人と文化の交差点となって発展しました。

(2) まちに恵みをもたらした中国山地の山と渓谷

中国山地は、地下深くからもたらされた蛇紋岩類や变成岩類、マグマ活動による流紋岩類と花崗岩類からなります。流紋岩地帯では深い峡谷や滝をつくり、花崗岩地帯ではたら製鉄が行われ、まちに恵みをもたらしました。

標高 1,188m の花見山を最高峰とする中国山地の部分は、古生代後期に地下深くで作られた蛇紋岩類や变成岩類、中生代後期のマグマ活動による流紋岩類と花崗岩類が主体です。蛇紋岩類は大佐山をはじめとする山体を形成し、河川は急流で、特に流紋岩溶岩や火碎岩^{かさいがん}の部分には渓谷や滝が多く見られます。この地域は林業が盛んで、険しい山を越えるために用郷林道のようなつづら折りの道が作られました。花崗岩類は砂鉄の原料となる磁鉄鉱を多く含み、それを使った、たら製鉄が盛んにおこなわれ、まちに恵みをもたらしました。砂鉄を得るための鉄穴流しによって、中国山地にありながら緩く開けた棚田が広がる独特の景観が見られます。



写真 3-2 たら製鉄（再現操業）

(3) 暮らしの場を作り出したなだらかな吉備高原

本市の南部になだらかに広がる吉備高原は、鯉が窪湿原などの湿原が多い田園地帯と、阿哲台と呼ばれる石灰岩地域からなります。それぞれの大地に根ざした特有の産業が生まれ、人々の暮らしの場となりました。

本市の南部には標高 400～500m のなだらかな吉備高原がひろがっています。この地域は古くから農地として利用されて来ましたが、特徴的な二つの地域に分けることができます。そのうち西部の哲西・哲多地域は高梁川のもう一つの源流域です。ここは北部の深く刻まれた谷とは違い、鯉が窪湿原で代表される湿原が多い田園地帯です。そのような開けた大地から顔を出す玄武岩の荒戸山【市】



写真 3-3 荒戸山【市】

は地域のシンボルです。この水量の多い吉備高原が神代和紙を作り、リンドウの栽培に結びついています。

一方、東部は阿哲台と呼ばれる、険しい崖で囲まれた石灰岩地域です。台地上には石灰岩地域特有の様々なカルスト地形が見られ、地下には多くの鍾乳洞が見られます。水に乏しい地域ですが、日当たりの良い緩やかな斜面を利用して畑作や果樹の栽培が行われています。中にはドリー内に集落があるなど、石灰岩地域が積極的に暮らしの場として利用されていることが大きな特徴です。現在本市の主要な産業を生み出している石灰岩は、鎌倉時代から江戸時代初期にかけて五輪塔や宝篋印塔等の石造物に加工され、また集落の石垣等に使用されるなど、生活に根付いていました。昭和時代初頭からはセメント産業を中心に、化学工業の原料などとして全国各地に運搬され、都市の基盤を作ってきました。本市の中央部から南東部にかけて見ることができる石灰岩の採掘場は、特徴的な風景の一つだともいえます。



写真 3-4 真福寺裏山五輪塔群及び宝篋印塔群【市】

◆大地が生んだ新見の歴史文化

古代から現在まで続く本市の歴史の中で、人々は地域の地形や地質と関わりながら、その折々の歴史文化を作り出してきました。その中で特筆すべきもの一つは、新見荘で代表される中世の荘園とその時代の文化で、それが現在の本市の原点です。そしてもう一つはそれに続く近世の備中松山藩や新見藩のまちづくりとひとつづくりの歴史です。さらに、人々はその歴史の中で、大地への畏敬や感謝を祈りや祭りという形で表してきました。

(4) 中世新見の荘園と歴史文化

本市では、中世に荘園が確認されており、特に新見荘は国宝「東寺百合文書」に数多くの史料が残り、当時の産業や支配体系、地名などが記録されています。また本市には多くの石造物や宮座があり、当時の歴史文化を今に伝えています。

高梁川とその支流沿いには複数の荘園ができました。なかでも、市街地周辺から北西端の神郷高瀬に広がっていた新見荘では、紙・漆・鉄などが生産され、船運も早くからあつ

たと考えられます。新見荘に関しては、支配体系や荘域内の有力者の動向などを記した国宝「東寺百合文書」など多数の文書が残され、そのうち直務代官として派遣された僧侶祐清の悲劇と彼の遺品を求めて書状を送った女性たまたまきの物語は今に伝えられています。

莊園内には製鉄遺跡や中世の彫刻・石造物・地名など、様々な文化的な遺産が多数存在し、またいくつかの神社には中世以来の由緒を持つ宮座が残されています。

(5) 今につながる近世新見のまちづくり、ひとづくり

近世には、備中松山藩の水谷氏がまちの基礎を築き、その後、新見藩の関長治は河川改修等を通して武家と商人のまちを作りました。また関政富は藩校の思誠館を創立して多くの逸材を育て、それは現在の教育のまち新見へとつながっています。

江戸時代に入ると備中松山藩主の水谷勝隆が高梁川の水路開発などの町の基礎を整備しました。さらに江戸時代中期には関長治が新見藩を立藩し、諏訪山（思誠小学校の御殿山グラウンド）に御殿（陣屋）を築き、菩提寺の西来寺をその北東に位置し、鎮守の船川八幡宮を南東に遷宮させ、町を南西に整備しました。特に流路が変化し洪水を起こしやすかった高梁川の河原を埋め立て作られた商人のまちは現在の御殿町につながっています。

新見藩3代藩主の関政富は藩士子弟の育成と庶民の教導を治政の理念と考え、藩校の思誠館を創立しました。その後督学となった丸川松隠は思誠館で指導する傍ら私塾を開き、山田方谷など多数の逸材を育て、江戸時代後期から明治にかけて教育のまちとなりました。この伝統は山間の小さな都市でありながら、大学、二つの高等学校が存在し「誰もが生き活きと輝く個性を育むまちをつくる」ことを理念とする本市の教育につながっています。

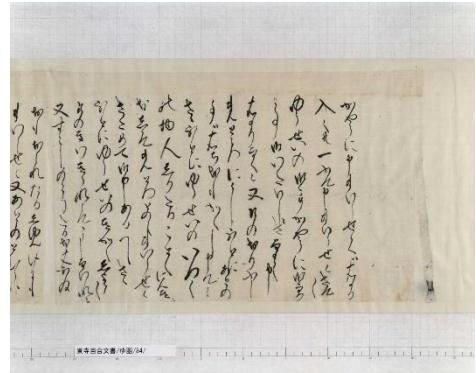


写真3-5 東寺百合文書 ゆ函/84
「たまかき書状並備中国新見庄代官祐清遺品注文」(一部)
出典：京都府立京都学・歴彩館 東寺百合文書 WEB



写真3-6 「藩醫思誠館之跡」碑

(6) 祈り・信仰を今に伝えるまち

飛鳥・奈良時代に寺社の建立がはじまり、平安・鎌倉時代には木造や石造の仏像が増え、新たな仏教宗派の寺院が創建しました。大地に根ざした民間信仰が広がり、そうした祈り・信仰が、地域の祭りとして残り、伝承されています。

標高約 500mにある豊永赤馬の三尾寺は神亀 4 (727) 年に、標高約 450mにある済渡寺(法曾)は天平 11 (739) 年に、それぞれ行基が開基し、平安時代に空海が開山となった寺院と伝えられています。日咩坂鐘乳穴神社(豊永赤馬)は、天平勝宝 2 (705) 年に勧請されたという古い由緒を持ちます。これらはいずれも阿哲台の台地上に作されました。

平安時代から鎌倉時代にかけて、真言宗を中心とした寺院や神社が建立され、南北朝期以降には、神応寺(神郷下神代)など、臨済宗や曹洞宗の寺院が各地に増えていき、江戸時代に入ると、関家菩提寺の西来寺が建立されました。

仏教の普及に伴って、11世紀には重福寺(豊永宇山)の三如来坐像や、長楽寺(哲多町矢戸)の木造阿弥陀如来座像【市】が造られました。中世には矢田石仏【県】(哲西町矢田)のほか、五輪塔、宝篋印塔などの石造物が造立されました。

このほか本市の信仰を特徴づけるも



写真 3-7 三尾寺本堂【県】

のとして、大地や歴史に根差した独特の祭祀があります。それは鍾乳洞を信仰の場とするものであったり、地域の有力者であった名主が団結と権威を示したものや、後醍醐天皇のお成りの由緒を伝えるもの、御神幸の警備、慰靈や豊年感謝の祈りを目的としたものなど、歴史的な形態を留める祭りが伝承・保存されています。